

旧標津線の廃線跡を利用した フットパスが歩く観光 (ウォークツアーリズム) へっつながる



小川 浩一郎 (おがわ こういちろう)
 (株)ジオ (THE-O) 代表取締役



1980年札幌生まれ。2001年エコ・ネットワーク代表代行、13年北海道科学大学客員准教授。札幌市南区常盤で育つ。『フットパス』をキーワードに市内、道内、国内で普及活動、ウォークイベントを実施し、ワールドウォーカーとして世界の「フットパス」を歩いている。「歩く」ことを通じて自然あふれる都市・札幌を観光客へ伝えるべく奮闘中。著書に「北海道フットパスガイド①」「北海道フットパスガイド②」。

根室振興局内全体に動き出したフットパス

根室市の酪農家集団が日本有数のフットパスをつくり、人気を博していることは以前お伝えしました。現在は根室振興局内全体の動きへと進化しています。

北海道にはかつて多くの鉄道が通っていました。根室地方で有名なものに「標津線」があります。根釧原野に総延長116km以上の鉄道が通り、標津町から根室市厚床まで続いていたものです。しかし1989年に廃線となり、現在に至っています。それを2000年代に入り、フットパスにする動きが出てきて、実際に利用されるようになりました。

廃線跡を活かした「旧標津線フットパス」

廃線跡とフットパスなどの歩く道は非常に相性がいいと考えています。

まず挙げられるのはアップダウンが少ないこと。もちろん列車を通すためにつくられたものですので、急なアップダウンがあっては列車が進めないのは明白です。よってほとんどが平坦につくられていて、普通に歩ける体力があれば誰でも歩くことができます。

次に挙げられるのは道幅が広いこと。列車の幅だけではなく、その周辺までしっかりと整備されています。北海道のフットパスはヒグマの生息する地域が少なくありません。道幅が広く、辺りの視界がよければヒグマ、人間双方にとって気付く機会が増え、無用な接触が限りなく少なくなります。実際に歩けばお分かりいただけると思いますが、歩いていても見晴らしがよく、心地よいという利点もあります。

次は整備する側の視点です。一度、鉄道が通ったのであれば地図に記載されます。新たにフットパスルートを設定する際、どこにルートがあるか一目瞭然です。後は草刈りという重要な作業はありますが、そこまでのどり着くのにゼロから設定するのでは、傾けるエネルギーが圧倒的に異なります。さらに鉄道が通っていたということは^{えきていしょ}駅通所などの歩く視点からみる副産物的な歴史や文化にも触れることができ、歩き+aが実現します。

そして最後は可能な地域とそうでない地域はあります



道幅の広い廃線跡のフットパス



が、河川などに架かる橋があることです。根釧原野にはいくつもの川が流れ、周囲は湿原が多くあります。整備した際に橋を架けたものでも30年ほどであれば人間が手直しすれば再利用が可能でしょう。実際に設置すると莫大な資金がかかるものが、それに比べるとほとんどかからないと言っても過言ではありません。

この「旧標津線フットパス」で2016年に複数区間が開通しました。現在でも全線開通に向け、整備が進められていると聞いています。一部未開通ですが、マップも発行されています（問い合わせ先：根室振興局TEL0153-23-6830）。

日本全国トップクラスの素晴らしい景観

それではそれぞれのポイントをご紹介します。

根室市では以前紹介した「根室フットパス」のインフォメーションセンターを兼ねる伊藤牧場から北側が、「明郷パス」として、元々整備されていた別海町の「旧標津線フットパス」とつながりました。ちょうど風蓮川周辺の湿原地帯を通るこのフットパスは周辺の景観が素晴らしく、幻想的な景観を醸し出しています。時折エゾシカの群れがルート前方を横切ったりもします。橋もしっかりと整備し直されており、当時の橋を補強する形で通行することも可能です。これほどの幻想的かつ素晴らしい景観はフットパスのみならず日本全国の歩く道の景観でもトップクラスと言ってもいいでしょう。

別海町側に入ってしばらく歩くと旧奥行臼^{おくゆきうす}駅通所に辿り着きます。国の指定文化財に指定されていて、当時の建築様式で今なお残っています。現在、補修や保存の工事も終わっています。国道や道道とも近接している上、バス路線にもなっていて駐車場もあるので、ここをターミナルとして歩く計画も立てられます。ここから別海町市街地の「別海プラト」まで旧標津線を歩くことができます。当時の面影を感じられる廃線跡ならではの遺物を感じながら歩ける上、時折隣接する牧草地でタンチョウが羽を休めているのに出くわすこともあります。他にも別海町内では短い区間ですが、いくつか旧標津線を利用したルートがあり、それ

も歩くことができます。中標津町内では上武佐^{むきさ}駅周辺がルートに設定されていて、上武佐ハリストス正教会や「遙^{はる}かなる山の呼び声」のロケ地を楽しみながら歩くことができます。

標津町内に入ると川北駅跡から標津町市街地までを歩けます。ここでも牧草地と隣接した道を歩くことができ、防風林の切れ目からは知床連山方面を見渡す絶景ポイントが続きます。現在は利用されていないかも知れませんが、時折、鉄器が置かれていて音を鳴らすことができます。ヒグマに人間の存在を知らせるためのもので、野生動物と地域住民の距離感も感じられます。最終的には旧根室標津駅まで続いていて、ここには転車台も残されています。

北海道らしいウォークツーリズムの芽ばえ

一部未開通部分もありますが、廃線跡を使うことで歩く観光の楽しみが増えます。ひとつのフットパスを歩くのではなく、フットパスの持つ素晴らしい要素のひとつ「つながり」を実際に経験することができます。多くの観光では見ることのできない景色を感じることができます。しかも開通した場合、このルートを1日で歩き切ることはほぼ不可能でしょう。数泊する必要があり、ポイントの町（集落）ごとに宿泊をすることになります。滞在時間が増えることで見えるものも格段に変わってきます。そうなることで今までは通過点でしかなかったところが、滞在拠点や人気スポットに変わる可能性も秘めています。歩くことは時間がかかりますが、その分より深く地域に触れられるチャンスです。現在はそういったニーズも高まっていることから、今後ますます歩きに来る人たちが増えることでしょう。現在、廃線となって間もない、または使われていない魅力的な鉄道跡が北海道内には多く存在します。せっかくなので日本人特有の「もったいない」という気持ちで歩く道に変えてみてはどうでしょうか。熊野古道や四国のお遍路のように長距離を歩く、いわば北海道らしいウォークツーリズムが芽生えるきっかけになるのではないかと思います。



旧標津線の鉄橋を歩く



標津市街地の転車台